イギリス文学史のテキストをめぐる一考察〈上〉　その１

道　行　千　枝

１．研究の目的

イギリス文学史の授業はイギリス文学への扉を開く導入の科目であるため，文学史の流れを把握するための網羅的知識をカバーしつつ，あまり詳細に至らないよう工夫する必要がある。学生によっては，その後の受講科目を選択したり研究分野を決定するうえでの判断基準にもなるだろう。受講生が興味を持ち，積極的に学習できるよう「面白さ」をもつことも大切である。どのテキストを選ぶかが，授業の内容を大きく左右する。数あるイギリス文学史のテキストの中で，筆者は川崎寿彦『イギリス文学史―A Brief History of British Literature』（成美堂，1988）を使用してきた。筆者が学生だった1990年代に，英文学史の授業で出会い，その内容の面白さに魅せられてこの本の中で紹介される名作の数々を読み漁った。しかし，この本も初版発行から30年近く経ち，使用される日本語が現在の学部学生には難解になり，国語辞典なしでは読めない部分もある。また，英文表題に“Brief”とあるにもかかわらず，内容が授業でこなせる量でないことは，上村忠実氏の指摘のとおりである。[1]

科目担当者と受講者の双方が使いやすく，知識が身に付き，興味が沸くテキストとはどういうものか。筆者は言語芸術学科にて上村氏と共にイギリス文学の科目を担当しているが，この問題を追及するため共同研究を行うこと

にした。本稿はその試みの第一段階をまとめたものである。なお，本紀要には研究の前半部分となる「イギリス文学史のテキストをめぐる一考察〈上〉その１」（筆者担当）と「イギリス文学史のテキストをめぐる一考察〈下〉その１」（上村担当）を発表し，研究の後半部分は次号以降の紀要に投稿する予定である。

２．テキストに必要な要件

ここに，学部学生向けのイギリス文学史のテキストに必要と思われる諸要件を挙げる。

・原文の引用を含む
・原文の読解を補助する注釈および日本語訳を含む
・時代背景の説明を含む
・作者の説明を含む
・作者と作品についての理解を深めるためのエクササイズを含む
・説明文の日本語はなるべく平易なものにする
・理解と興味を促すための図版を含む
・総章数は二学期制で通年分を想定し，30章以下とする。一学期中に２回を復習の時間に充てるとすれば，26章が適当と思われる

筆者らは数年前にある一冊の入門書に出会った。Stephanie Aldred & Judith Godfrey, *Literary Landscapes: An Introduction to English Literature* (Lexis Publishing, 1991)という，イギリスの pre-GCSE および EFL 向けの教材である。全部で９章，全50ページ。各章の構成はおおむね以下のとおりである。１）イントロダクション（時代的・文化的背景）とエクササイズ，２）作品紹介と原文引用，注釈，エクササイズ，３）作家紹介とエクササイズ，４）その時代を代表する文学のジャンルの紹介

Literary Landscapes は，説明文が平易で時代と作者・作品についての解説が面白くかつ詳細に過ぎないという点で，筆者らが求めるテキストのモデルとなる要素を備えていた。しかし日本の学部学生向けのイギリス文学入門書としては情報量が充分とは言い難く，英文学史の中で抑えるべき作家・作品が出揃っているわけではない。そこで，まずこの本を試訳し，必要に応じて書き直し，不足する部分を書き足すという形で，筆者らの目指す使いやすいテキスト作りを試みることにした。本稿第３節は，*Literary Landscapes* の試訳である。第１章から第４章までを筆者が担当し，第５章から第９章までを上村氏が担当する。各章のタイトルについては上村氏を参照されたい[2]。なお，紙幅の都合上，著者（Aldred & Godfrey）の原文のみ試訳する。*Literary Landscapes* に引用されているイギリス文学の原文とそれに対応する日本語訳は次号に掲載予定である。第４節では，文学史のテキストとして過不足のない章立てになるように，*Literary Landscapes* に不足している諸項目を挙げ，筆者らの目指すテキストの骨組みを提示することで本稿を締めくくる。

３．試訳

文学の風景
―イギリス文学入門―

第１章
文学誕生以前

イントロダクション

近世イギリス文学の起源は，中世にさかのぼる。人口の大部分は農地を耕し，読み書きができるのはごくわずかな人々に限られていた。出版業や印刷技術，文筆業などが出現する前の時代である。作家の中には，たとえばジェフリー・チョーサー（Geoffrey Chaucer）など，宮廷付きの官僚を本業とす

る者もいた。彼はエドワード三世の外交官を勤めていた。『農夫ピアズ』（*Piers Plowman*）の作者ラングランド（Langland）は，聖職者だった。文筆で稼ぐことなど誰も考えもしなかったのである。

本は手書きで書かれ，聖職者が書き写して写本を作った。彼らはしばしば精巧な装飾入りの版を作った。中世の写本は，カンタベリーやイーリー，ヨークなどの大聖堂で見ることができる。彩飾の施された本とそれらを保管する見事な建物は，いわゆる「暗黒時代」の技術と芸術の完成度を示す好例となっている。

庶民は娯楽としてバラッドや物語に親しんだ。この時代の文学に登場するヒーローは，シャーウッドの森に愉快な仲間と暮らすロビン・フッドである。彼は富める者から盗み，貧しき者に分け与えるアウトローだった。ロビンの一味には，大男のリトル・ジョンや楽士のウィル・スカーレット，太っちょの修道士タック，そしてなんと女性のキャラクターで乙女マリアンもいた。

この時代の伝説で今でもよく知られているのはアーサー王と円卓の騎士の物語である。これらの物語の中で最も名の知れたキャラクターは魔法使いのマーリン，美しき貴婦人グゥイネヴィア，勇敢な騎士ランスロットだ。中世のはじめの頃には詩も大変人気があった。詩は，アングロサクソン人の村々で領主の屋敷に集う人々を前に，歌か語りによって伝えられた。詩が書き残されることはあまりなかった。古英語で書かれた『ベオウルフ』（*Beowulf*）はこの口承の伝統をそのまま引き継いでいる。

ディスカッションのポイント

a）ロビン・フッドは今日でも大変高い人気を誇る。変わらぬ人気の理由を説明しなさい。

b）口承の伝統とはどういうものか，説明しなさい。

珠玉の表現

神話と魔法

（引用省略　William Caxton (1421-1491)

Le Morte D'Arthur, Sir Thomas Mallory (d 1471)

Robin Hood Ballad

The Cuckoo Song (12th century))

分析

1．キャクストンの職業は何か。

2．キャクストンの本のテーマは何か。

3．キャクストンは，これらの物語を出版することによる効果として何を期待しているのか。

4．anvil の意味を説明しなさい。

5．イングランド王を決めるために魔術師マーリンが仕掛けた難題は何か。

6．二つ目の原文を現代英語に書き換えなさい。

7．ロビン・フッドの一味がいつもリンカーン・グリーンを着ているのはなぜか。

8．*Summer is a-coming in* の歌の中で夏を示す季語を挙げなさい。

『カンタベリー物語』

以下は，チョーサーの有名な『カンタベリー物語』（*The Canterbury Tales*, 1386）の出だしである。はじめの数行は，春の気候がいかにして人々を巡礼の旅―さしずめ現代の休暇にあたる―に誘うかを語っている。巡礼をなりわいとする聖地巡礼者が国外へ足を伸ばすのに対し，イングランド各地に住む一般の巡礼者はカンタベリーを目指した。

（引用省略　Geoffrey Chaucer, *The Canterbury Tales*）

中世の詩は二つの重要なテーマを備えている。宗教的な寓意（たとえば『農

夫ピアズ』*Piers Plowman*）とロマンチックな冒険（たとえば『ガウェイン卿と緑の騎士』*Sir Gawain and the Green Knight*）である。チョーサーの長編詩『カンタベリー物語』は二十九名の巡礼者がロンドンからカンタベリーに向かう途中に語り合う複数の物語で構成されている。物語には，そして作者が描写する巡礼者たちの様子には，寓意や冒険，滑稽話，風刺などが含まれている。

チョーサーの巡礼者の一行をとおして，十四世紀のイングランド社会の全体像を見ることができる。一行の中に含まれるのは，騎士，船乗り，粉屋，医者，法律家，商人，主婦，学生など。様々な役職の聖職者も描かれる―ある者は鋭い皮肉とともに，ある者は温かく共感を込めて。巡礼者たちが語る物語は，ヨーロッパ全土から集められたもので，ほとんどすべての物語が道徳的問題を鋭くついて締めくくられる。

以下は『カンタベリー物語』の序歌（General Prologue）からの引用である。チョーサーは騎士について次のように説明している。

（引用省略　Geoffrey Chaucer, *The Canterbury Tales*）

さらにチョーサーは騎士が巻き込まれた数々の命がけの戦いについて語り，次のようにその人物像を説明する。

（引用省略　Geoffrey Chaucer, *The Canterbury Tales*）

分析

1．騎士が尊んだものは何か。
2．彼はどのような兵士だったか。
3．彼は戦闘でどこに赴いたか。
4．騎士という人物の最大の特徴を詩人はどのように語っているか。
5．次の文を現代語に書き直しなさい。*He was a verray, parfit, gentil knight.*

作者略歴

ジェフリー・チョーサー（Geoffrey Chaucer, 1343～1400年）

1343年頃にワイン商人の家に生まれる。1357年にクラレンス公の小姓となり，1359年にエドワード三世のフランス侵攻軍に参加。捕虜となるが，代償金を払って解放される。1366年に妻フィリパと結婚。この頃，フィリパの親戚にあたるジョン・オブ・ゴーントの庇護を受ける。国王に仕える数々の役職につき，外交官として幾度となく海外に赴いた。1372年のジェノバとフィレンツェ派遣の際にはボッカチオとペトラルカに会った可能性がある。1374年にロンドン港の関税官に任命される。ウエストミンスター寺院の詩人のコーナーに埋葬されている。

分析

1．チョーサーの父親の職業は何か。
2．チョーサーの最初の職は何か。
3．チョーサーが兵士になったのはいつのことか。
4．フランスではどのようにして解放されたのか。
5．チョーサーはどのようにして裕福な貴族ジョン・オブ・ゴーントと面識ができたのか。
6．チョーサーの宮廷での主な仕事は何か。
7．チョーサーが最後に務めた公務は何か。
8．ジェフリー・チョーサーはどこに埋葬されているか。

中世演劇

中世演劇のテーマは，ほぼ宗教的なものに限られていた。聖人の行動を扱う奇跡劇，キリストの生涯を扱う受難劇，そして商人すなわち「ギルド・プレーヤー」が聖書の物語を演じる聖史劇があった。役者たちは荷車の上に舞台を造って市場を引き回し，観客はついて回るのだった。

今日でも，ヨークとチェスターでは祭りの季節になると市の立つ広場で聖

史劇が上演される。ヨーク，チェスター，ウェイクフィールド，コヴェントリーを発祥とする聖史劇シリーズはよく知られている。最も有名なのは『ノアの方舟』（*Noah's Ark*）と『キリストの降誕』（*the Nativity*）で，その地方の話題や同時代の登場人物が追加されたりする。

次の一節は，十四世紀の聖史劇からの引用である。天使ガブリエルが聖母マリアのもとに現れ，彼女が女たちの中から聖別されてイエスという名の子を授かることになると告げる。つづりはなるべく現代つづりに置き換えた。

（引用省略　出典の記載なし）

演劇の起源

中世末期には，演劇の人気がいよいよ高まった。地元の素人役者が様々な形態で宗教劇を上演していたのに加え，旅回りの役者の一座が喜劇や時の話題を芝居にしていた。シェイクスピアが生まれる頃には，旅回りの役者はイングランド全土でよく見られるものになっていた。彼らは街や村を回って芝居をする職業役者だった。シェイクスピアも最初の演劇体験を祭日の出し物で得たとされていて，ひょっとすると旅回りの劇団で演劇人としてのキャリアをスタートさせたかもしれないともいわれている。

これらの芝居は，円形で上演されることが多く，あのエリザベス朝の「グローブ座」（the Globe）の劇場型式の土台となった。初の演劇専用の建物が造られたのは1576年だが，1600年までにロンドンだけでも８つの劇場ができていた。

ロンドンのグローブ座

（図版省略）

第二章
オックスフォードとケンブリッジ出身者

イントロダクション

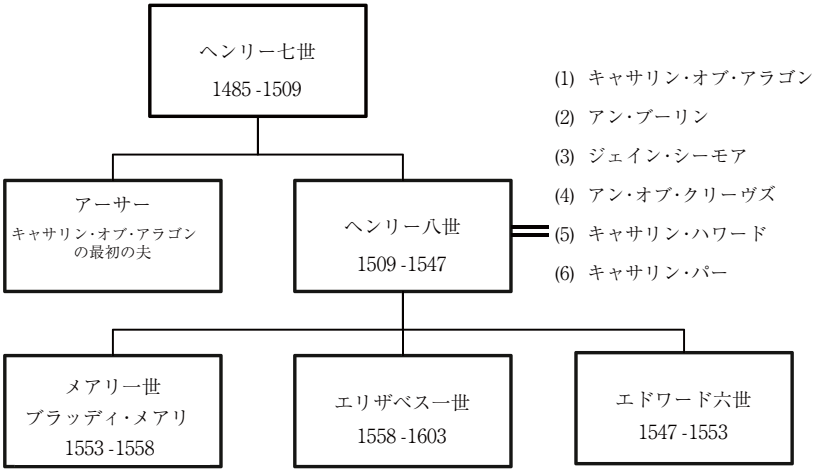
十六世紀のイギリスはかつてない変化の時代であった。宗教，政治，経済は混乱を極め，人々の視野（ホライズン）は世界探検の旅によって文字通り広がっていった。航海士たちは，新世界から胸の踊るような話を持ち帰り，科学者たちは錬金術や天文学の分野で新発見を続けた。偉大なる発明の時代であった。十七世紀のはじめには，ジェイムズ一世が潜水艦でテムズ川の川下りまでやってのけたといわれる。オックスフォード大学とケンブリッジ大学はその重要性を増し，多くの分野において秀才を集めていた。例えばハレー彗星でおなじみのエドマンド・ハレーはオックスフォードのクイーンズカレッジに勤めていたし，海洋探検家でタバコをイギリスに導入したサー・ウォルター・ローリーもまた，オックスフォード大学出身だった。

十六世紀のテューダー王朝の君主たちは歴史に大きな足跡を残した。六人の妻を持ったことで知られるヘンリー八世はローマ法王と決別してイギリス国教会を創設した。息子のエドワードはプロテスタントで，彼の「庇護者」たちは多数のカトリック教徒を処刑した。エドワードは若くして亡くなり，姉のメアリが王位を継いだ。彼女は熱心なカトリックで，短い治世の間に多くのプロテスタントを焚刑に処した。今日，彼女は「ブラッディ（血みどろの）・メアリ」の名で知られている。次にヘンリー八世の次女が女王となった。エリザベス一世は賢く勤勉家で，その長い治世の間に宗教の安定と経済的発展をなし遂げた。

テューダー朝期には，ケンブリッジのキングズ・チャペルやカンタベリーのキングズ・スクールなど，多くの名門校や礼拝堂が創設された。イギリス・ルネッサンス期は芸術の黄金時代だが，一方で宗教的にはきわめて不寛容で，君主による専制政治が濫行し，多くの人々が自らの信念のために処刑された。

ディスカッションのポイント

ヘンリー八世が多くの妻をめとったのはなぜか，その理由を考えなさい。



珠玉の表現

啓蒙の時代？

（引用省略　Francis Bacon (1627)

Anon. *On Sir Francis Drake*

Ben Jonson, *Every Man in his Humour*

Archbishop Thomas Crammer at the stake 1556

Thomas More, 1535

Prayer Book 1662

John Donne）

ノートテイキング

上の引用のうち，テューダー朝時代の発明について述べたものはどれか。

宗教的不寛容の犠牲となった人物が残した言葉はどれか。

セックスとバイオレンス

クリストファー・マーロウ（Christopher Marlowe）はシェイクスピアと同時代の劇作家である。靴職人のもとに生まれ，カンタベリーのキングズ・スクールとケンブリッジ大学に学んだ。1593年にパブでの喧嘩で死亡したが，彼が行っていたスパイ活動の政敵によって仕組まれた暗殺という説がある。代表作は四つの悲劇，『タンバレイン大王』（*Tamburlaine the Great*），『フォースタス博士』（*Doctor Faustus*），『マルタ島のユダヤ人』（*The Jew of Malta*），『エドワード二世』（*Edward the Second*）である。タンバレインのキャラクター像は，グロテスクなまでに冷酷で無慈悲なほど野心に満ちている。人類と神に挑み，最後には死神に敗れる。次の独白は，マーロウの『フォースタス博士』からの引用である。フォースタス博士は悪魔に魂を売るが，死を悟ったとたん，自分が天国に行く可能性はほとんどないことに気づくのである。

（引用省略　Christopher Marlowe, *Doctor Faustus*）

分析

1．これから一時間のうちにフォースタスの身に起こることは何か。
2．*be damned eternally* の意味を説明しなさい。
3．疑問文 *who pulls me down?*の答えは何か。
4．*firmament* とは何かを説明しなさい。
5．キリストの血の「半滴」がどのようにしてフォースタスを救うことができるのか，説明しなさい。

愛の詩

（引用省略　Ben Jonson, *To Celia*）

分析

1．次の動詞の意味を辞書で調べなさい。*drink to; pledge; sup*

2．女性はどのようにして「杯に…キスを残す」ことができるのか，説明しなさい。
3．人間の身体は生理的に飲み物を必要とするが，ジョンソンによると魂はどうなのか。
4．ジョーヴの神とは誰のことか。
5．詩人が最近女性に贈った愛のしるしは何か。
6．彼がそれを贈った本当の理由は何か。
7．詩人の恋が報われなかったことを示す表現はどれか。
8．詩人の女性への強い気持ちを表すものとして，最後に使われているイメージは何か。
9．次の単語に相当する意味を持つ語を本文から抜き出しなさい。
swear; *require*; *dried up*
10．この詩を読んで，詩人がどの程度望みを持てるのか考えなさい。

作者略歴

ベン・ジョンソン（Ben Jonson, 1572-1673年）

ロンドンまたはその近郊に生まれる。牧師の父は彼が生まれる前に亡くなっていた。ウエストミンスター・スクールに学び，1590年代のはじめには継父のもとでレンガ職人の修行をしていた。兵役でフランドルに赴く。敵の兵士をひと突きで倒す。旅回りの劇団で役者を始める。1597年に役者兼劇作家として仕事を始める。彼の極めて風刺的な作品『犬の島』（*Isle of Dogs*）が上演された時には，投獄の憂き目にあう。1598年に役者仲間を決闘で死なせる。絞首刑は免れたが，重罪人の烙印を押される。1598年にシェイクスピアをキャストに含んだ『癖者ぞろい』（*Every Man In His Humour*）が初演される。1599年には『癖者そろわず』（*Every Man Out Of His Humour*）がグローブ座で上演される。1600年，『シンシアの饗宴』（*Cynthia's Revels*），『へぼ詩人』（*Poetaster*）。1603年，シェイクスピアが所属する劇団によってジョンソン初の現存する悲劇『セジェイナス』（*Sejanus*）がグローブ座で

上演される。1605年，初の宮廷仮面劇が上演され，アン女王が黒人の役で出演する。

この年，『東行きだよ！』（*Eastward Hoe!*）を執筆したために投獄され，さらには火薬陰謀事件に関して法廷で証言する。1605年，『ヴォルポーネ』（*Volpone*）がグローブ座とオックスフォード，ケンブリッジの両大学で上演される。1610年『エピシーン―もの言わぬ女』（*Epicene*），『錬金術師』（*The Alchemist*），1614年『バーソロミュー祭り』（*Bartholomew Fair*）上演。1616年にはジェイムズ一世から年金をもらい，実質上の桂冠詩人となる。オックスフォード大学から名誉学位を与えられ，これによって演劇の社会的地位が向上する。宮廷仮面劇を執筆。舞台装置はイニーゴ・ジョーンズが手がける。1628年に脳卒中で倒れ，寝たきりになる。1637年に死去。ウエストミンスター寺院に埋葬される。

分析

1．ジョンソンの亡き父の職業は何か。
2．彼の継父の職業は何か。
3．ジョンソンが1590年代に殺したのは誰か。
4．ジョンソンが1597年に投獄された理由は何か。
5．ジョンソンが1598年に殺したのは誰か。
6．シェイクスピアが初めて出演したジョンソンの作品は何か。
7．1603年にシェイクスピアの劇団が所有する劇場で上演されたジョンソンの作品は何か。
8．ジョンソンの作品で，王族が黒人の女性として登場したものはどのような種類の劇だったか。
9．1605年にジョンソンを再び獄中に送ることになった風刺劇は何か。
10．ジョンソンが事実上の桂冠詩人と呼ばれる理由を述べなさい。
11．イギリス演劇が社会的地位を認められたのはいつか。
12．ジョンソンと共同制作した著名な建築家は誰か。

天国と地獄

ジョン・ミルトン（John Milton）

ミルトンの代表作は1665年に書かれた叙事詩『失楽園』（*Paradise Lost*）である。天使の反乱とアダムとイブの堕罪をテーマにしている。作品を支配する登場人物はサタンである。彼は傲慢で英雄的とさえいえる反逆者で,「天国で仕えるより，地獄に君臨するほうがまし」と言ってのける。

次の一節は，サタンが神から地獄へ追放された場面で，ミルトンは彼を取り巻く新しい環境について語っている。

（引用省略　John Milton, *Paradise Lost*）

分析

1．*dungeon* とは何か。
2．地獄のかまどに燃える炎にはどのような特徴があるか。
3．ミルトンによると，地獄に存在しないものは何か。
4．降り注ぐ炎を燃やす燃料となるのは何か。
5．‘sad’とほぼ同じ意味の単語を文中から三つ抜き出しなさい。
6．地獄の炎に関連する単語をできる限り挙げなさい。

「グリーンスリーヴズ」

（引用省略　Henry III, *Greensleeves*）

この恋愛詩はヘンリー八世が書いたものである。ディクテーションしなさい。

あるルネッサンス人

ジョン・ダン（John Donne）は，詩人，学者，探検家，政治家，説教者の顔をもつ優れた真のルネッサンス人である。オックスフォードとケンブリッジの両大学に学んだが，カトリック教徒だったために，学位は与えられなかった。十二人の子をもつ父でもあった。

（引用省略　John Donne, “Going to Bed”）

１．詩人の恋人はどのように新大陸と比較されているか。

２．この詩を暗記しなさい。

（引用省略　John Donne, “Meditation XVII”）

３．次の語の意味を調べなさい。*main*, *clod*, *promontory*, *manor*, *toll*

４．この瞑想録を現代英語に書き換えなさい。

第三章
ストラットフォードの男

イントロダクション

シェイクスピア（Shakespeare）はロンドンの北西85マイルのところに位置する市の立つ町，ストラットフォード・アポン・エイヴォンに生まれ育った。生年月日は1564年４月23日とされている。この時代，ストラットフォードの人口は数千人規模だった。町の中心にはエイヴォン川が流れていて，その上に架かる美しい橋が町民にとっては恰好の釣り場となっていた。中世にさかのぼる歴史をもつ町としては珍しく，道路は広くまっすぐのびている。1569年までにはプロの劇団が市の集会所を訪れるようになっていて，その同じ場所でシェイクスピアは初等教育を受けた。その後，文法学校（グラマー・スクール）に上がり，ラテン語，文法，読み書き，暗唱を教わった。（シェイクスピアは古典の成績はぱっとしなかったようである。）

ヘンリー通りにあるシェイクスピアの生家は，当時のストラットフォードの中産階級に一般的だった木骨造りの建物である。住居として使用されると同時に，手袋職人であった父の仕事にも使われた。生家のほかに現存するのは，アン・ハサウェイの家―シェイクスピアの妻が結婚前に住んでいた美しい家―とシェイクスピアが隠居生活を送ったニュー・プレイスである。彼は1616年４月23日に52歳で生涯を終える。ホリー・トリニティ教会に埋葬され，そこには記念の胸像が飾られている。

ディスカッションのポイント

シェイクスピアの家族と彼が受けた教育について説明しなさい。

珠玉の表現

（引用省略　William Shakespeare, *Romeo and Juliet*
Julius Caesar
Richard III
Hamlet）

たたき上げの劇作家

シェイクスピアはイギリス演劇界において他の追随を許さない巨匠である。彼の作品は多くの言語に翻訳され，映画やオペラの題材になった。彼自身，劇作家であると同時に役者であり，劇場の経営者でもあった。作家として仕事を始めたのはロンドンに出てからで，そこでは彼の所属する劇団が1699年[3]以降グローブ座を拠点に活動していた。彼の生涯についてわかっていることといえば，ストラットフォードとロンドンで生活していたこと，勤勉に働いたこと，高度な教育を受けていないこと，海外渡航歴がないこと，くらいである。生前に出版された劇作品はなく，創作年ははっきりしない。しかし彼は目の高い批評家から称賛され，その一人ベン・ジョンソンはシェイクスピアの追悼文を書いた。作品の中には，聴衆の期待に応えるべく急いで書かれたと思われるものもある。シェイクスピアは観客の好みを知っていて，演劇界の流行に乗ることができた。エリザベス朝の演劇は一般の人々にとって気軽に触れることのできる娯楽であった。男も女も子どもも芝居を観ることはできたが，女性が演技をすることは禁止されていたため，女性の役は少年が演じた。

ノートテイキング

シェイクスピアの生涯についてわかっていることはほとんどないが，明ら

かになっていることを三つ挙げなさい。

シェイクスピアの正典

シェイクスピアの劇作品は喜劇，歴史劇，悲劇（ローマ史劇を含む），後期のロマンス劇に分けられる。

喜劇

『間違いの喜劇』（*The Comedy of Errors*），『じゃじゃ馬ならし』（*The Taming of the Shrew*），『ヴェローナの二紳士』（*Two Gentlemen of Verona*），『夏の夜の夢』（*A Midsummer Night's Dream*），『恋の骨折り損』（*Love's Labour's Lost*），『ヴェニスの商人』（*The Merchant of Venice*），『お気に召すまま』（*As You Like It*），『から騒ぎ』（*Much Ado About Nothing*），『十二夜』（*Twelfth Night*），『ウィンザーの陽気な女房たち』（*Merry Wives of Windsor*），『尺には尺を』（*Measure for Measure*），『終わり良ければすべて良し』（*All's Well that Ends Well*）

歴史劇

『ヘンリー六世第一部』（*Henry VI part 1*），『ヘンリー六世第二部』（*Henry VI part 2*）[4]，『リチャード三世』（*Richard III*），『ジョン王』（*King John*），『リチャード二世』（*Richard II*），『ヘンリー四世第一部』（*Henry IV part 1*），『ヘンリー四世第二部』（*Henry IV part 2*），『ヘンリー五世』（*Henry V*），『ヘンリー八世』（*Henry VIII*）

悲劇

『タイタス・アンドロニカス』（*Titus Andronicus*），『ロミオとジュリエット』（*Romeo and Juliet*），『ジュリアス・シーザー』（*Julius Caesar*），『ハムレット』（*Hamlet*），『トロイラスとクレシダ』（*Troilus and Cressida*），『オセロー』（*Othello*），『リア王』（*King Lear*），『マクベス』（*Macbeth*），『アテ

ネのタイモン』（*Timon of Athens*），『アントニーとクレオパトラ』（*Anthony and Cleopatra*），『コリオレイナス』（*Coriolanus*）

ロマンス劇

『ペリクリーズ』（*Pericles*），『テンペスト』（*The Tempest*），『シンベリン』（*Cymbeline*），『冬物語』（*The Winter's Tale*）

シェイクスピアはこの他にソネット集と物語詩も書いている。今日の読者からみるとかなりの数の作品を書いたように思えるが，シェイクスピアの同時代には作品数が数百にものぼる多作の作家もいた。

喜劇

喜劇は展開が早く複雑な筋立てで，同時代に話題になっていたジョークや言葉遊びがふんだんに盛り込まれている。ストーリーにしばしば使われるのは，人違いが原因のゴタゴタで，『間違いの喜劇』などのように，ふたごの組み合わせの間に起こったりする。前途多難な恋愛トラブルも題材になる。『十二夜』ではオリヴィアは従僕の少年に恋をする。少女が変装しているという事実に気づかずに！『夏の夜の夢』では妖精の女王ティターニアが惚れ薬を飲まされてロバに恋をしてしまうのだ！

舞台設定は，ヴェローナやアテネ，ヴェニスなど外国におかれるものもあれば，『お気に召すまま』のアーデンの森のように自国に設定されるものもある。[5]『お気に召すまま』のタッチストーンや『十二夜』のマルヴォーリオなど，劇中の出来事に皮肉たっぷりなコメントをする道化が登場する。観客は主人公たちと一緒になって道化の言動を笑うのである。

『夏の夜の夢』

次の会話は『夏の夜の夢』の一部である。アテネの「田舎者」たちが公爵と公爵夫人のために芝居を上演しようとしている。登場人物たちはアテネ人

という設定だが，明らかに十六世紀のウォリックシャーの田舎商人をモデルにしている。彼らが選んだ演目は「ピラマスとシスビー」。演出を務めるピーター・クインスが役を振り分けている。ニック・ボトムは張り切り屋で，二つ以上の役をやりたがっている。

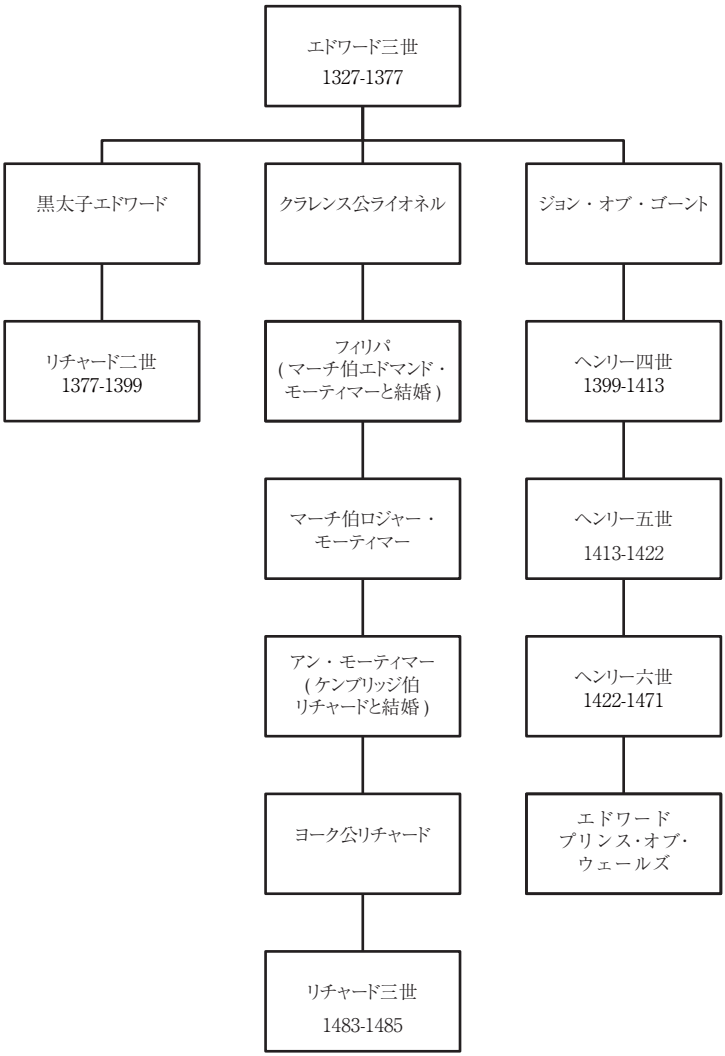
（引用省略　William Shakespeare, *A Midsummer Night's Dream*）

分析

1．職人たちの芝居はいつ上演される予定か。
2．ピラマスはどのような役か。
3．「ピラマスとシスビー」は喜劇か，悲劇か。
4．役者たちの職業は何か。
5．女性の役を演じるのは誰か。
6．彼はなぜその役を演じたがらないのか。
7．演出のクインスは，シスビー役を男が演じているという事実を隠せると考えているが，その理由を説明しなさい。
8．指物師のスナッグは読み書きが得意でないが，それが問題にならないのはなぜか。

歴史劇

シェイクスピアはホリンシェッド（Holinshed）の『年代記』（*The Chronicles*）など，実際の出来事からプロットを借りて歴史劇を創作したといわれている。歴史劇に登場するのはイングランドの王や王妃，その臣下たちだ。エリザベス朝の人々は王権は神から授けられたものと信じていて，歴史劇に繰り返し登場するテーマは，正当な，もしくは不当なやり方での王位継承である。たくさんの政治家による権力争いが描かれるが，後期の歴史劇，たとえば『リチャード二世』などにおいては，キャラクターの人物形成がより重要になっている。歴史劇の文体は，詩的というよりも修辞的である。シェイクスピアの歴史劇の特徴は，何よりもまず愛国的なことだ。ヒロインはイン



グランドで，賢君や暴君がやって来ては去っていく。しかしエリザベス朝の観客にとって重要な国民意識はいつだって大変強いのである。

『ヘンリー五世』

次の一節は『ヘンリー五世』からの引用である。王は兵士たちを戦闘に向けて奮い立たせる。彼は農民（独立農民（ヨーマン））に語りかけ，先祖の名に恥じぬようにと勇気づける。ヨーマンは比較的「高貴な」血筋であるというのだ。王は彼らに，戦いの場では，強く，熱烈で，勇敢であれと言う。

（引用省略　William Shakespeare, *Henry V*）

分析

1．ヨーマンの手足が「イングランド製」ということが重要なのはなぜか。
2．王はヨーマンの瞳に何を見出すのか。
3．*The game's afoot* とはどのような意味か説明しなさい。
4．王はどのようにしてヨーマンをほめているか。
5．ヘンリーとその臣下たちが戦っている相手は誰か。

悲劇

シェイクスピアの最大の功績は，その悲劇作品にある。人間のあらゆる状態における苦悩が扱われている。ものごとの展開が人間の内に秘められた悪と組み合わさり，彼らを破滅へと導く様子が描かれる。これは「悲劇的欠落」（tragic flaw）と呼ばれるもので，主人公を死に追いやり，彼らを取り巻く世界を破壊する。

主人公の心理的苦悩は，部分的には自ら招いたもので，彼らは強迫観念にかられているように見えるが，もとをたどれば誰にでもある感情に起因している。例えば『リア王』では劇の冒頭で王が国土を分け与える見返りに，感謝の気持ちだけでなく，こびへつらいも期待している様子が描かれる。末娘が，ただ率直に簡潔な言葉で取り分を受け取ると，怒りの言葉をぶちまけ，その怒りはひどい憎しみへと変わる。主人公が判断力を失っていく様子が観客の目の前でまざまざと演じられる。物語が進むにつれて，観客は主人公が

狂気に陥るのは避けられないということに気づかされる。ある意味，結末の予想がつくからこそ，恐ろしさも力強さも増すといえる。

後期の悲劇になると，愛はロマンチックなテーマではなく，肉欲として描かれ，その背景も嵐のように荒れ狂う。病気や腐敗，堕落や血のイメージが繰り返し登場し，ありとあらゆる暴力シーンが繰り広げられる。しかし，悲劇の結末には再生のきざしが描かれる。

『オセロー』

下記は『オセロー』からの抜粋である。勇猛果敢な軍人でムーア人のオセローは，嫉妬に駆られて妻デズデモーナを殺す。劇の冒頭で，シェイクスピアはオセローにイアゴーという敵がいることを示す。イアゴーはオセローの出世を激しくねたんでいる。イアゴーはさらに自分を差し置いてオセローの副官に昇進したマイケル・キャシオーを憎んでいる。イアゴーは二人の男に復讐を企み，オセローに妻のデズデモーナとマイケル・キャシオーが不倫の仲だと信じ込ませる。劇が進行するにつれて，イアゴーはキャシオーとデズデモーナに対して不利な証拠をでっちあげる。彼はキャシオーがデズデモーナのハンカチを持つように仕組み，オセローにそれを見せる。観客は，第一幕で誇り高く堂々とした指導者だったオセローが，最終幕では無残に痛めつけられる犠牲者へと身を落とす様子を目の当たりにする。最終幕で，彼は自分の経歴も幸福も妻をもたたき壊し，自ら命を絶つのである。

（　引用省略　William Shakespeare, *Othello*）

分析

1．オセローが入ってきたとき，デズデモーナはどこにいたのか。
2．デズデモーナが最後の祈りを言い終えることがオセローにとって重要なのはなぜか。
3．デズデモーナが心配するオセローの身体に現れた三つの兆候とは何か。

4．オセローにとってハンカチは何を象徴するものか。
5．キャシオーがデズデモーナを弁護しに来ることができないのはなぜか。
6．オセローはキャシオーに対する嫉妬と憎しみの深さをどのようなイメージを使って表現しているか。
7．デズデモーナが代わりに懇願している罰はどのようなものか。
8．デズデモーナが死の瞬間を先延ばしにしようとしていることがわかるセリフはどの部分か。
9．次の一節をわかりやすく言い換えなさい。*O why should I fear I know not, since guiltiness I know not;*
10. *perjured woman* という表現の意味を説明しなさい。

後期ロマンス劇

十七世紀の初めにかけて，いわゆる「悲喜劇」（Tragi-Comedies）の人気が高まった。このジャンルはロマンス劇と悲劇の要素を混ぜ合わせたものである。シェイクスピアもこの流行に従い，四つの円熟した作品を書き，悲劇的状況が和解によって解決する様子を描いた。舞台の設定は現実離れしていて，牧歌的でロマンチックである。現実からの楽しい逃避が，家族の絆と義務というシリアスなテーマとともに描かれる。これらの作品を，シェイクスピアの熟年期の円熟した人生観の表れだと言う批評家もいる。

『テンペスト』

次の『テンペスト』からの一節は，シェイクスピアの公に向けての別れのあいさつと考えられてきた。この作品は彼の最後の作とされている。作中で，老プロスペローはこれまで自分が見ていた芝居が幕を閉じる様子を語る。役者や大道具によって創り出された舞台上のまぼろしは，今や「実体のない」ものになる。

（引用省略　William Shakespeare, *The Tempest*）

分析

1．プロスペローの芝居に出てくる役者は妖精や精霊である。彼はどのような意味で舞台の役者はすべて妖精であると言っているのか。

2．シェイクスピアがここで語っている舞台装置を三つ挙げなさい。

3．人生はどのような面で芝居に似ているか，説明しなさい。

言葉の天才

シェイクスピアが英語に残した影響力ははかり知れない。英語の慣用句の多くは彼が作ったものである。単語にいたっては二千語近くが彼が編み出した造語である。例を挙げると，excellent，critical，obscene，lonely，hurry，majestic，summit，aggravate など。シェイクスピア劇との関連によって意味が変化した単語もある。例えば weird は「運命的な」から「奇妙な」に変化したが，これは『マクベス』の「奇妙な姉妹たち（weird sisters）」という表現がきっかけとなっている。

ソネット28[6]

（引用省略　William Shakespeare, “Sonnet 18”）

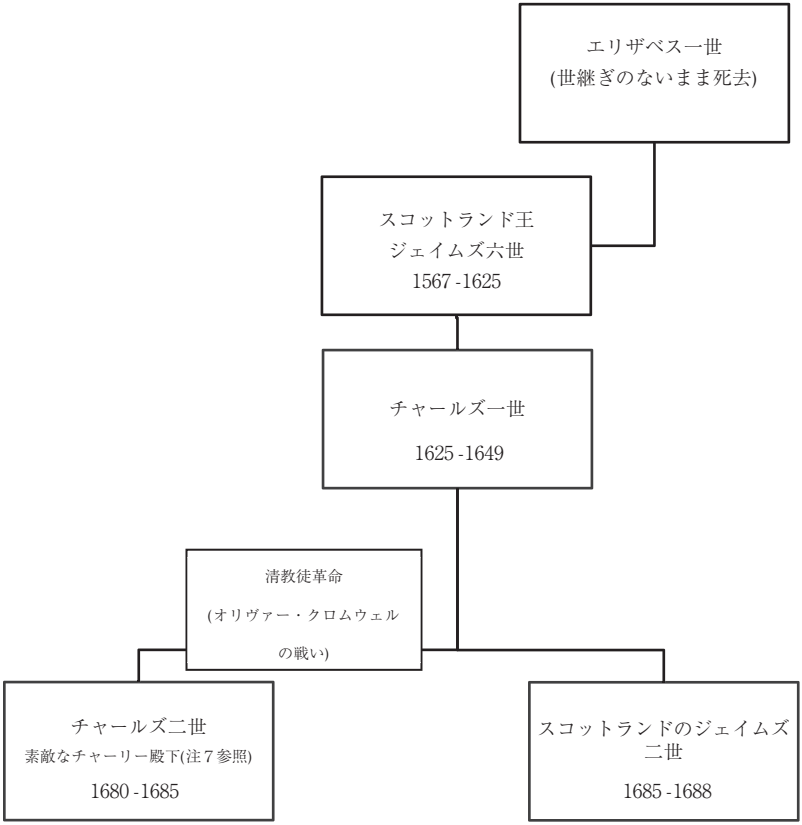
a）この詩の意味について小グループでディスカッションしなさい。

b）この詩の一部を暗記しなさい。1－8行目または9－14行目のどちらかを選びなさい。

第四章
ロンドンの生活

イントロダクション

十七世紀はイギリスの歴史において多くの変化が起こった時代である。エリザベス一世が世継ぎのないまま亡くなり，スコットランドのジェイムズ六世が王位を継いだ。ジェイムズの息子のチャールズ一世は議会によって処刑



された唯一の英国王である。1660年にチャールズ二世（素敵なチャーリー殿下[7]）が王位を主張してイギリスに戻り，イギリスの君主制は復活した。これを「王政復古」（Restoration）という。

チャールズ二世は遊び好きで，ピューリタンが道徳上問題があるという理由で二十三年間閉鎖していた劇場を再開させた。再出発した演劇は人気も親しみやすさもかつてないほどのものとなった。女優が容認されたことや，宗教的に寛容な時代の風潮が重なって，男女の問題など多様な社会的テーマが取り上げられるようになった。

チャールズの治世の最初の数年間にはひどい疫病が国中に蔓延し，何千人

もの命を奪った。さらに1666年にロンドンを焼き尽くす大火事が発生した。街は一から再建されることとなった。セントポール大聖堂を設計したクリストファー・レン（Christopher Wren）などの建築家がロンドンの街を一変させるべく委任を受けた。この時代に建てられた建築物は現在も残っている。

日記作家で官吏のサミュエル・ピープス（Samuel Pepys）はこのような出来事の多くを記録に残した。彼は疫病とロンドン大火，それに続く街の再建について，日々の日課のあれこれと共に書き留めた。以下はピープスの日記からの抜粋である。

ノートテイキング

ピープスが次のことを行った日付を書きなさい。

a）昆虫について哲学的な会話を楽しんだ
b）「見物する」ため，また「見物される」ために公の場に出かけた
c）著名な女優ネル・グウィンに初めて会った
d）街を破壊したロンドン大火を目撃した
e）死亡事故が起きた後を目撃した
f）ロンドンの再建計画を見た
g）新しい服を見せびらかすために散歩に出た

ある都会人

（引用省略　Samuel Pepys, *Pepys' Diary*）

十七世紀の輪唱

次に引用するのは現代の子供たちにも歌い継がれている，よく知られた輪唱である。

（引用省略　"London's Burning"）

ジョン・ドライデン―時代の先を行く男

ジョン・ドライデン（John Dryden, 1631-1700）は王政復古期に登場した最初の大物劇作家である。多作の作家で，その作品は戯曲や詩，エッセイ，手紙，古典の翻訳など多岐にわたる。『当世風結婚』（*Marriage a la Mode*）は間もなくやってくる自由放埒（ほうらつ）な時代の一端を匂わせている。十七世紀のピューリタン主義は，十八世紀の，より寛容で人文主義的な道徳観に道を譲りつつあった。

（引用省略　John Dryden, *Marriage a la Mode*）

分析

1．文中に使われる次の単語を使って，同義語のペアをつくりなさい：*vow*; *pleasures*; *love*; *joys*; *passion*; *oath*

2．第一連の *decayed* の意味を説明しなさい。

3．*Till our love was loved out*. を別の言葉で言い換えなさい。

4．なぜ喜びは「消えた」のか説明しなさい。

5．結婚はいつも喜びに基づいていたと言うが，どのような意味でそう言えるのか説明しなさい。

6．語り手はどのようなタイプの友人について述べているか。

7．語り手によると，夫ないしは妻が愛人を持つことが道徳に反しないとされるのはどのような場合においてか。

8．語り手は，結婚において嫉妬は愚行だと言うが，それはなぜか。

9．語り手の性別はどちらか。

10．あなたはこの詩で主張されている内容に賛成か。ドライデンはどう考えているか。

レストレイション・コメディ（Restoration comedy）

1660年に劇場が再開するやいなや，それらは不道徳でわいせつな場所だという評判がついた。その理由の一端は，王政復古期の劇作家たちが喜劇の枠

組みの中で主に男女間の密接な関係をテーマに扱ったからである。そういった世間の批判にもかかわらず，劇作家たちは活躍した。国王チャールズ二世が演劇を庇護し，有名な女優ネル・グウィンなどを恋人に囲ったからである。

ウィリアム・コングリーヴ（William Congreve, 1670-1729）は王政復古期の売れっ子劇作家である。代表作は『世の習い』（*The Way of the World*）で，その一部を下記に引用する。フェイノール夫人は男性たちの態度に不満である。マーウッド夫人は女性側が男性に恋するべきだという説を支持するふりをするが，フェイノール夫人が同意を拒むと，次のように本心を明かす。

（引用省略　William Congreve, *The Way of the World*）

分析

1．男性が　ア）女性に恋しているとき　と　イ）女性に飽きたとき　はそれぞれどのように厄介か。

2．*The man so often should out-live the lover* という一文の意味を説明しなさい。

3．マーウッド夫人は「飽きて捨てられるほうが，一生愛されないよりまし」と言うが，あなたは賛成か。

4．フェイノール夫人は友人が「放蕩者」のような口ぶりだと思うが，それはなぜか。

5．フェイノール夫人はなぜ男性を毒蛇にたとえるのか。

6．マーウッド夫人は，もはや男性を憎んだりはしていないと言う。現在の彼女の男性観はどのようなものか。

7．マーウッド夫人は，結婚することで，どのように男性をいじめようとするのか。

8．マーウッド夫人によると，男性は自分の妻が不貞を働いているかもしれないと恐れることのほうが，実際に不貞を働いていることを知るよりも恐ろしいことだと言うが，それはなぜか。

9．次の語句と同じ意味の語句を本文から抜き出しなさい。*Phantoms;*

repulsion; an immoral person

10. 二人の女性の言動は，現代においてどの程度通用するか考えなさい。

十七世紀のバラッド

チャールズ二世は政敵から逃れるために女装してスコットランドを抜け，船でスカイ島にたどりついたと言われている。次の歌はその歴史に残る旅の模様を伝えたものである。

（引用省略　“The Skye Boat Song”）

４．考察

以上に見てきたように，*Literary　Landscapes* はイギリス文学の初心者向け入門書としてよく考えられた構成となっている。時代背景や作家についてのエピソードで読者の興味をつかみ，原文読解とエクササイズで作品への理解を促す。解説の英文も簡潔平易で読みやすい。しかし上村氏も指摘するとおり，そのまま文学史のテキストとして使用するには情報量が不足している。[8]　筆者らは *Literary　Landscapes* の内容を補完すべく，先に挙げた川崎寿彦『イギリス文学史』を参考に，文学のキーワード，作家名，作品名を追加することにした。その取捨選択の方法は上村氏の述べるとおりである。[9]　また，新たに文学史のテキストを編纂するにあたって，今の時代の潮流を鑑みる必要があろう。『イギリス文学史』の初版は1988年，*Literary Landscapes* は1991年に出版されている。それから三十年近く経つ現在，イギリス文学の「主流」もまた変化してきている。文学史の中で，「主な作家」「主な作品」とみなされるものは，時代の流れに無関係ではない。例えば十七世紀の王党派詩人ロバート・ヘリック（Robert　Herrick，c.1591-1674）は十八世紀にはほとんど名の知れない作家だったが，ロマン主義の登場とともに突如脚光を浴び，作品が刊行されるようになった。[10]　さらに現代ではノーベル文学賞を受賞した西インド諸島出身の V.S.ナイポール（V.S. Naipaul, 1932-）や日本生

まれのカズオ・イシグロ（Kazuo Ishiguro, 1954-）など，イギリス出身でない作家の活躍もみられる。筆者は『イギリス文学史』および *Literary Landscapes* の「古さ」を補うため，2014年に「21世紀初の本格的イギリス文学入門」[11]として刊行された石塚久郎編『イギリス文学入門』（三修社，2014）を参考に，新たな項目も追加した。[12]以下に挙げるのが、それらの追加項目である。

第 1 章　古英語・中英語の文学

・ケルト人，ローマ人，ゲルマン人
・古英語（Old English）
・英雄叙事詩（heroic epic）
・*Beowulf*
・ノルマン征服と William the Conqueror
・中英語（Middle English）
・頭韻（alliteration）と脚韻（rhyme）
・夢想寓意詩（dream allegory）

第 2 章　ルネサンスの散文と詩

・Thomas More, *Utopia*
・宗教改革と英国国教会（the Church of England）
・Thomas Wyatt
・Henry Howard, Earl of Surrey
・弱強五歩格（iambic pentameter）
・シェイクスピア形式のソネット（Shakespearean sonnet）
・Philip Sidney, *Astrophel and Stella, Arcadia, An Apologie for Poetry*
・牧歌（pastoral）
・Edmund Spencer, *Faerie Queene*

第３章　演劇が起こる

・常設劇場の登場
・大学才人（University Wits）
・Thomas Kyd, *The Spanish Tragedy*
・John Lyly, *Euphues*
・Christopher Marlowe, *The Jew of Malta*
・弱強五歩格無韻詩（blank verse）

第４章　シェイクスピア

・グローブ座の構造と上演形態
・四大悲劇

第５章　清教徒革命まで

・*The Authorized Version*
・Francis Bacon, *Essays*
・Jacobean dramatists
・Francis Beaumont & John Fletcher
・John Webster, *Duchess of Malfi*
・形而上派詩人（Metaphysical poets）
・形而上派的奇想（Metaphysical conceit）
・王党派詩人（Cavalier lyrists）

第６章　王政回復期

・風習喜劇（comedy of manners）
・英雄悲劇（heroic tragedy）
・英雄対韻句（heroic couplet）
・牧歌哀歌（pastoral elegy）
・John Bunyan, *The Pilgrim's Progress*

・桂冠詩人（poet laureate）
・John Dryden, *All for Love, An Essay of Dramatic Poesy*
・Aphra Behn, *The Rover, two parts*

Literary Landscapes は掲載されている作家が不足していることに加えて，「古英語」や「中英語」といった英語史に関するキーワード，「頭韻」「脚韻」「弱強五歩格」など原文を読む際に必要なキーワード，「英雄叙事詩」「牧歌」などジャンルの名称などが欠けていることがわかった。上記第一章，十四〜十五世紀の部分では，「古英語」「中英語」と現代英語との違いについての解説を加える必要がある。第二章の十五世紀末〜十六世紀末はテューダー朝の時代背景と宗教改革についての解説を追加し，ソネットや物語詩について説明する必要がある。第三章ではシェイクスピア以外の劇作家の活躍について述べる必要がある。シェイクスピアを学ぶ上で同時代の演劇ブームの知識は不可欠と考えるからである。*Literary Landscapes* 第三章と『英文学史』第四章はどちらもシェイクスピアに一章を丸ごと割いている。*Literary Landscapes* はシェイクスピア作品の各ジャンルの解説がバランスよく配分されているが，劇場の構造や上演形態についての記述がないため，これらを加える必要がある。上村氏が構想するように，筆者らの目指すテキストはイギリスでのフィールドワークを前提としたものである。[13]ロンドンのグローブ座での観劇はフィールドワークのハイライトのひとつでもあるため，劇場構造についての知識は備えておきたい。第五章の十七世紀前半は清教徒革命を目前に国内が王党派と議会派に二分され，文学の作風も二手に分かれた。背景となる歴史と文学との関連について解説を加える必要があるだろう。第六章の十七世紀後半には，王政復古期に活躍した女流作家アフラ・ベインを追加した。『イギリス文学史』にも *Literary Landscapes* にも触れられていないが，石塚編『イギリス文学入門』には記載がある。ヴァージニア・ウルフが「イギリス初の職業的女性作家」とみなして以来注目されるようになった。フェミニズムを経た現代，無視できない作家である。

今回，テキストの構成は『イギリス文学史』にならい，全体を十四章立てで組んでみた。筆者はそのうち第一章から第六章を担当した。『イギリス文学史』は通年使用で一章を二回の授業で読むことを前提として書かれている。[14]ただし本稿第二節で述べるように，各学期に二回を復習にあてるならば，章立ては二十六章（または二週で一章を読むとするなら十三章）が適当である。章の構成については今後検討する必要があるだろう。今後の研究の課題は次の三点である。（１）*Literary Landscapes* の内容を精査すること，（２）新たに追加する情報を原稿にまとめること，（３）文学作品からの引用とそれに対応する日本語訳を作成すること。これらの成果については次号以降の紀要にて発表する予定である。

注

1 上村忠実「イギリス文学史のテキストをめぐる一考察〈下〉　その１」『福岡女学院大学紀要　人文学部編』第27号（2016年），109頁

2 上村，80頁

3 正しくは1599年。

4 原文に不足あり。このあとに『ヘンリー六世第三部』（*Henry VI part 3*）が入る。

5 アーデンの森はフランスの設定だが，そこで描かれるのはイングランドの田舎そのものの様子である。

6 原文の誤り。正しくは Sonnet 18。

7 原文の誤り。「素敵なチャーリー殿下」（Bonnie Prince Charlie）はチャールズ二世ではなく，ジェイムズ二世の孫チャールズ・エドワード・スチュワート（1720-88）のこと。名誉革命で亡命したジェイムズ二世とその子孫を正当な王位継承者とするジャコバイトの反乱（1745）で王位継承者に立てられ，ウィリアム三世の政権を脅かすが失敗した。

8 上村，109頁

9 上村，109-110頁

10 石塚 久郎編『イギリス文学入門』（三修社，2014），73頁

11 石塚編，２頁

12 本書は序文に「最近の研究動向が反映された新しい文学史や入門書の類が少ないという声を受けて出版されました」（２頁）とあるとおり，文学史の知識を更新する上で有益

な手引きとなる。

[13] 上村，79頁

[14] 川崎寿彦『イギリス文学史』（成美堂，1988；rpt. 2011），i 頁